

2-1			
主題	ユニット型介護老人福祉施設における個別ケアの継続について		
副題	家族の支えて「生きる喜び」が得られた事例を通して		
キーワード1	個別ケア	キーワード2	家族
		研究(実践)期間	11ヶ月
法人名	社会福祉法人 練馬区社会福祉事業団		
事業所名	上石神井特別養護老人ホーム		
発表者(職種)	小寺俊司(介護士)		
共同研究(実践)者	尾高つばさ(介護士)、宮内裕理(介護士)		
電話	03-5903-3051	FAX	03-5903-3052
今回発表の事業所やサービスの紹介	平成 25 年に練馬区にオープンした特養・ショート合わせて 36 床の小規模なユニット型の介護老人福祉施設です。今年で開所 4 年目になり、地域の方々との交流も多く、大勢の介護サポーターやボランティアの方の支えもあり入居者の生活の支援をしています。		
《1. 研究(実践)前の状況と課題》 当施設では、入居当初から高齢者、重介護度、複数疾患を抱える入居者が多く、4 年目を迎えた。看取りを視野に入れた個別ケアの実現に向け、家族との積極的な関わりを持ち、情報と現状の共有の必要性が大きくなった。 [事例] A 様、女性。93 歳、呼吸不全で在宅酸素の生活を送られていた。当施設に入居された際、踵部に褥瘡があり徐々に食事が減り体調不良が続くようになった。入居間もない中看取りの同意書も交わした。体調不良の影響で楽しみの食事・短歌などが出来ない状態が続いた家族の献身的な支援があり徐々に体調が回復傾向になった。 体調が良くなりました際に、本人から「何でこんな所にいるのか分からない。」「家に帰りたい。」「娘と話がしたい。」などの訴えが聞かれるようになった。慣れない施設生活の中、本人が話された訴えを聞いた事がきっかけで、「本人にとって、ここでの生活を楽しく暮らして行けるにはどうしたら良いか」を視点に個別ケアの取り組みを行った。		《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》 【当施設の 5 つの理念】 1. 一人ひとりの人生を尊重して暮らす。 2. 生きがいを持って暮らす。 3. 家族との時間を大切に暮らす。 4. 家庭的な雰囲気の中で暮らす。 5. 施設に入居しても地域で暮らす。 これらを満たし、A 様にとって施設での生活を楽しく、その人らしく過ごせるようになる為に、A 様、家族、施設が一体化になって取り組みを行った。 また、取り組みを通して家族や施設が A 様に与える影響や A 様にとっての家族の存在を改めて感じ、施設での生活が以前より楽しく過ごせる事を目的とした。	

《3. 具体的な取り組みの内容》

対象者：A 様

《1》昔から行っていた短歌作りの再開

《2》毎週土曜日に娘様との夕食の時間

《3》他のフロアの利用者との繋がり

《4》娘様からのお手紙

《5》毎日の日課であった新聞購読

《6》居室内の環境整備及び日中帯の対応

取り組んだ職員や構成：家族とユニット職員

《4. 取り組みの結果》

《1》昔から行っている短歌作りでは、施設に入居されてからも家族の協力のもと変わらずに行っている。短歌にはさまざまな事が書かれており、施設生活の中で完成された短歌もある。

《2》娘様との夕食の時間は、家族の協力のもと行えている。施設の食事でもご本人様のお好きな食材は出てくるが、やはり生まれ育った地の味は忘れられない。本人は元々食が細く、たくさんの量を召し上がる事が出来ない。一週間に一度の楽しみであり、職員が『今日の夕食は娘さんが持って来てくれる日ですよ。』と伝え、拍手をしながら『やったー。』と笑顔が見られた。

《3》共通の趣味を持つ B 様と C 様がいて、職員が間に入り交流を行っている。B 様とは短歌の短歌集を互いに交換したりして交流を図っている。また、C 様とも互いに声を掛け合って交流をい。C 様から『またここに来た時に会いましょうね。約束よ。』と互いの手を握り合っていた。

《4》家族から本人宛にお手紙が届くと、手紙を真剣に読み職員に『娘から手紙が来て今〇〇〇なんだって。』と娘様からのお手紙の内容を教えて下さる。その後もお手紙を大事に持って行かれ、ベッドに横になられている時もじっくり何度も読み返されている

《5》平成 28 年 2 月より朝刊のみ新聞を購読するようになった。ある日、『この記事面白いから取っておきたいんだけどどうしたら良い?』と話があった。職員が記事を切り取り、家族が後日持って来たノートに切り取った記事を貼り保管されていた。

《6》A 様は入居されてから居室のベッドからご自身で動かれて数回転倒・転落をされた事がある。同じように転倒・転落が起らないよう、また万が一が起こったとしても最小限な事故で終わるように居室内の環境整備を行った。また、その他にも自宅でも使っていた筆筒や時計・写真なども家族が用意して下さった。

《5. 考察、まとめ》

当施設の 5 つの理念の中にある【家族との時間を大切に暮らす】、【生きがいを持って暮らす】に重点を置いた際に、A 様にとっての施設生活の質の向上を目指すには、家族の協力や自身の生きがいが必要不可欠である。

「個別ケア」実現に向けては家族の協力が必要不可欠である。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご家族に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

1)厚生労働省「2015 年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～」(2016 年 7 月 1 日確認)

2)村田 麻起子(2013 年 3 月)「介護保険施設サービスにおけるチームマネジメントとその課題」(佛教大学大学院 社会福祉学研究科篇第 41 号)

3)藤井ら(2010 年)「介護老人保健施設における利用者主体の個別ケア - 介護職員の認識から - 」(関西福祉科学大学紀要第 14 号)

《8. 提案と発信》

現在、施設に入居されている人の中には帰宅願望のある方や、A 様のような施設の生活に慣れずにいる方などが多くいると思われる。そのような方々への対応やアプローチを個々にしていく事がユニットケアの始まりであり、個別ケアの実現であると思う。